

憶良の作品の成立と伝来

今井福治郎

巻の五の編纂者は山上の憶良である。と云ふ説が、従来一部に行はれてゐる。その立論は、本巻に憶良の作品の多いこと、従つてこれから、憶良と明記されてゐないものも、彼の作品ではなからうかと云ふやうな点から主張されてゐる。しかしこの点をもつて、直ちに彼に當ててゐることは早計であるが、本巻に彼の作品の大部分と云ふよりは、彼の作品の中樞を占めてゐるものが、凡て取められてゐることは興味のある点である。ことにこれらの作品が、九州に居を移した以後のものであることは、愈々もつて興味がある。

巻の一・二と、巻の三・四とは、それぞれ兩巻をもつて一卷と成る編纂法であるのに対して、巻の五はこれと全く異質の編纂法であることは、編纂者の相違を思はせる。よし例へば、編纂者は同一人であるとしても、編纂に使用した資料が、前四巻と全く異質のものに依つてゐることは明瞭である。漢文の序又は漢詩を伴つて長歌・反歌の配列されてゐる点は、その最も相違するところで、日本風な歌物語語に対して唐風な詩物語語である。と云へるが、更に和漢朗詠又は、句題和歌の

素朴な形を示してゐるとも云へよう。やがて古今集の假名書と真名書の序となつて展開する要素を、本巻は既に持ち伝へてゐる。本巻が又、大伴の旅人——大伴家——と密接な関係の上に成立してゐることも事実で、憶良の作品の成立・伝来について、旅人との交渉の深いことは、容易に知ることが出来る。

例へば、「世間の住り難きを哀しめる歌」(五の八〇四)に於いて、「少女等が 少女さびすと 唐玉を 手本に纏かし」を、「或はこの句、白妙の 袖ふりかはし 紅の 赤裳裾引き」といへるあり」と註し、「紅の」を「一に云ふ、丹の頬なす」と註し、「面の上に 何処ゆか 皺搔きたりし」の下に、「一に云ふ、常なりし 笑まひ眉引き 咲く花の 移ろひにけり 世の中は かくのみならし」と註してゐるが、この事情は、憶良自身の原歌と伝来歌との相違を見せてゐるものである。この註は編纂時に書き入れたもので、作品を正しく伝へようとし、万代に本巻の正しい姿を残さうとした意図が、こゝにも窺へるが、この三註の中で、「或はこの句云々」と他

の二註は、別本に依るものと思はれる。最後の「一に云ふ、常なりし云々」の註は六句あるので、それ以前とすると「何時の間か」以後となり、これでは意味が通じないことになる。それで、「紅の」以後の挿入句と思はれる。従つて、「紅の 面の上に 何処ゆか 皺搔きたりし」の原歌に対し、

(一) 何時の間か 霜の降りけむ 丹の頬なす 面の上に 何
処ゆか 皺搔きたりし

(二) 何時の間か 霜の降りけむ 常なりし 笑まひ眉引 咲
く花の 移ろひにけり 世の中は かくのみならし

と伝へた二本のあつたことを知ることが出来る。結局、この事情は、憶良の原歌に対して三種の伝本のあつたことを示すものである。

憶良の原歌は、憶良集とも云ふべきもの又は、憶良自身の手記の類に収められてゐたもので、これは逆に云ふと、本巻の成立はこの類の資料を母胎としてゐることになるが、三種の伝本の中には大伴家伝来のものがあつたに違ひない。

○ 憶良の研究の一方法として、旅人と比較することが従来行はれてゐる。比較することが、一作品、一作者の真姿を、愈々立体化、明確化することなので、意識的に、無意識的に、その方法の採用されることは寧ろ当然であるが、憶良と旅人との場合にあつては、根本的に不分離の状態に置かれてゐる。

。憶良の歿年時七十四才については、様々な理由を挙げて疑ふ説もある。しかし、それとても全く決定的なものとは云へない。今暫く、七十四才をもつて彼の歿年時とすると、旅人より五年早く生れ、二年後れて死去したが、憶良が筑前に下向したのは神亀三年、六十五才の時で、これ以後の作品が集中に多く収められ、旅人も亦、作品が多く収められてゐるのは、神亀五年九州に下向した六十四才以後である。即ち、憶良は六十五才から九年間、旅人は六十四才から三年間、いづれも九州を母胎にした作品が多いが、これは単に偶発事項として考へることが出来ない。その最も大きな理由は、両歌人が都を離れた異郷の地に於いて、相互に刺戟し合つて作歌に励んだこと、つまり、それまでの作歌精神がこの地で湧出したことを意味するが、両者が共に相前後して老妻を失つたことは、振れ合ふ魂に大きな振幅を与へた。憶良は九州時代の作品の一部分を、旅人に見せたが、この場合、「山上憶良上」、(五の七九九の左)「憶良謹上」、(五の八七〇・八八二の左)「山上憶良頓首謹上」(五の八九三の左)の書式を使用してゐる。この形式には、古来の道徳律の枠内にあつた良国守憶良の面目を誠によく表はしてゐるが、これ以外の作品が、旅人の眼に触れなかつたと、断言することは出来ない。「世間の住り難きを哀める歌」(五の八〇四・八〇五)と「敬みて熊蹯のためにその志を述ぶる歌」(五の八八六―八八九)には、「筑前国守山上憶良」とあつて「謹上」の文字は記されていないが、官名の記されて

みるところに依ると、旅人に見せたものであらうし、これとは又逆に、「貧窮問答の歌」(五の八九二・八九三)には、「筑前国守」の官名が記されてゐないので、国守解任後に見せたものであらうとの推定も立つ所以である。従つてこのやうな關係に依つて、憶良の作品が旅人を通じて大伴家に保存され、それが本巻成立の際に資料として提供されたものであらう。これからして本巻の成立は、憶良没年の天平五年以後、編纂者の一人には、大伴家に近い者が携はつたことであらうと推定される。

さて、旅人没後、憶良と大伴家との和歌的交渉を示す一例として、家持を挙げる事が出来る。これも亦、従来の方法で、別段新奇なものではないが、今のところ確実な傍証と云へよう。例へば、天平十六年の春二月、安積の皇子の薨去の際に作つた家持の歌六首中の一首に、次の長歌がある。

……活道山 木立の繁に 咲く花も 移ろひにけり 世の中は かくのみならず 丈夫の 心振り超し 劔刀 腰に取り佩き 梓弓 鞆取り負ひて 天地と いや遠長に 万代に かくしもがもと 憑めりし 皇子の御門の 五月 蠅なす 騒ぐ舎人は 白細に 服取り着て 常なりし 咲ひふるまひ いや日けに 変らふ見れば 悲しきろかも

(三の四七八)

これは家持二十七才の時の作品であるが、この歌の構成法

が、憶良の、「世間の住り難きを哀しめる歌」の構成法と、それを支へている情感とに非常によく似ているのは、單に偶然的相似性と云へるであらうか。前者の「咲く花も 移ろひにけり 世の中は かくのみならず……万代に かくしもがもと 憑めりし 皇子の御門の 五月蠅なす……常なりし 咲ひふるまひ」は、後者の「一に云ふ、常なりし 笑まひ眉引 咲く花の 移ろひにけり 世の中は かくのみならず 丈夫の 壯士さびすと 劔太刀 腰に取り佩き 鞆弓を 手握り持ちて」に、前者の「万代に かくしもがもと」は、後者の反歌「常誓なす かくしもがもと」に、且又前者の「五月蠅なす 騒ぐ舎人は」は、憶良の「老身重病年を経て辛苦す云々」(五の八九七)の「五月蠅なす 騒ぐ児等」と同じ表現であるが、家持の作品が憶良の別本系統に依つてゐるのは、別本が大伴家に伝はつてゐたのであらう。後述の目次と題詞との關係が示すやうに、目次には一様に、「山上臣憶良」とあるのに対して、家持の作つた「勇士の名を振ふを慕ふ歌」(十九の四一六四・四一六五)の左註に、「山上憶良臣」とあるのは、この問題に暗示を与へてゐる。題詞に於いてこれを見るに、「山上憶良臣」(三の三三七)の例以外は、凡て「山上臣憶良」となつてゐるのは、目次の作製者とに關係がありさうである。尚又、痾に、沈んだ時の作品(六の九七八)の左註に、「山上憶良臣痾に沈みし時、藤原朝臣八東河辺朝臣東人をして疾む所の状を問はしむ。ここに憶良臣、報の語已に畢り、しばらくありて涕を拭ひ、悲しみ嘆きて、この歌を口吟めり」と

あるのはその場に居合せた者でなければ書けない手記である。作者の自記でないことは云ふまでもない。作者の自記でないとする、誰人かの手に依るものであらうが、それは不明である。しかし、題詞の記載と違つてゐるので、題詞の筆者とは別人であらうが、これも亦、大伴家に關係があるやうに思はれる。

さて、大伴家に伝はつていた別本は、憶良が旅人に謹上した作品であるので、旅人によつて九州から都に将来され、別本に依らない作品は、憶良集又は憶良の手記とも云ふべきものに取められてゐたものであらう。そしてこの別本は口誦流布に依るものではなく、作者自身の推敲に依るものと思はれる。憶良の作品は民謡のやうに、口誦伝承される性格は薄い。この点、彼の作品だけではなく、同一作品の相違を、直ちに口誦伝承に依るものであるとして解決するのは早計である。尚、憶良集又は、憶良の手記とも云ふべきものにあつたことは、本文・題詞・目次の記載の相違に依つても知ることが出来る。目次と題詞については、

- 目次——筑前の守山上臣憶良の挽歌一首短歌并
せたり
- 題詞——日本の挽歌一首
- 目次——山上臣憶良の、惑へる情を反さしむる歌一首短歌并
せたり
- 題詞——惑へる情を反さしむる歌一首序
せたり
- 目次——山上臣憶良の、子等を思ふ歌一首短歌并
せたり
- 題詞——子等を思ふ歌一首序并
せたり

- 目次——山上臣憶良の、世間の住り難きを哀める歌一首短歌并
せたり
- 題詞——世間の住り難きを哀める歌一首序并
せたり
- 目次——山上臣憶良の鎮懐石を詠める一首短歌并
せたり
- 題詞——ナシ
- 目次——山上臣憶良の松浦の歌三首
- 題詞——ナシ
- 目次——山上憶良の和ふる、熊凝の為に志を述ぶる歌一首短歌并
せたり
- 序并せたり 筑前国守山上憶良
- 目次——貧窮の問答歌一首短歌并
せたり
- 題詞——右に同じ
- 目次——山上臣憶良の好去好來の歌一首短歌并
せたり
- 題詞——好去好來の歌一首反歌二首
- 目次——山上臣憶良の、病に沈みて自哀む文一首
- 題詞——病に沈みてみづから哀む文山上憶良の作れる
- 目次——山上臣憶良の、俗の道の假に合ふは即離れ去り易く、留り難きを悲歎める詩一首序并
せたり
- 題詞——俗の道の、假に合ふは即離れ去り易くして、留り難きを悲歎く詩一首序并
せたり

目次——山上臣憶良の、重き病にありて児等を思ふ歌一首
短歌并
 せたり

題詞——老いたる身に重き病ありて年を経て辛苦、及び
 児等を思ふ歌七首長一首
 短六首

目次——男子名は古日に恋ふる歌一首短歌并
 せたり
 題詞——男子名は古日に恋ふる歌三首長一首
 短二首

と云ふやうに相違がある。本文と題詞との関係は、例へば、日本挽歌・令反感情歌・思子等歌・哀世間難住歌のやうに作者自ら註記したものもあり、「恋男子名古日歌三首長一首
 短二首」のやうに作者以外の者の註記もある。この場合の、「長一首短二首」の「短二首」の中には、「右の一首は、作者未だ詳ならず。但し歌を裁る体、山上の操に似たるを以ちてこの次に載す」と編纂者の左註を持つ歌があるので、これを作者自ら自己の歌として題詞に記すわけがない。この場合は却つて目次の、「歌一首短歌并
 せたり」の方が、その作製者は別であつても、真意を伝へてゐることになる。目次はこのやうに後人の作製に依るもので、各作品について、「山上臣憶良」と記入し、同一体裁を整へてゐるが、それは同時に作者を明示したことにもなる。しかし、これについても問題である。鎮懐石（五の八一三・八一四）の歌は、目次には憶良の作となつてゐても研究すべき点が多く、旅人の作ではないかとする説もあるからである。だが、目次は作者以外の者の作製であるにしても、本文の成立時から長年月を経過した後の作製ではなく、

また、目次を作製する時に、本文から全く離れて作る筈はないので、この歌の作者を、憶良とする一本のあつたことが考へられる。いづれにしても憶良の作品の伝来については、九州と大和とを中心にして、大伴家との関係を考へる必要がある。

さて又、憶良のこの長歌（八〇四）の最後が、「たまきはる命惜しけど せむ術も無し」で結ばれてゐるが、この手法を家持は採用してゐる。その一例は同年作安積の皇子の薨去の長歌の最後の句であり、他は同十一年六月、「亡ぎにし妾を悲傷みて作れる歌」の一群である。即ち前者は、「……ひさかたの 天知らしぬれ 展転び 沾ち泣けども せむすべも無し」（三の四七五）と結び、後者は、「……名づけも知らに跡のなき 世間になれば せむ術の無し」（三の四六六）と結んでゐる例である。しかし、家持と憶良との近接感は、かうした部分的表現句だけの問題ではない。同年を中心にして例を挙げると、家持の作の、

うつせみの代は常なしと知るものを秋風寒み思ひつるかも
 （三の四六五）

時はしもいつもあらむを情いたくい去く吾妹か若子を置き
 て（三の四六七）

出でて行く道知らませばあらかじめ妹を留めむ関も置かま
 しを（三の四六八）

妹が見し屋前に花咲き時は経ぬわが泣く涙いまだ干なくに
 （三の四六九）

世間し常かくのみとかつ知れど痛き情は忍びかねつも (三の四七二)

などの類は、憶良の「日本挽歌」、「男の子古日に恋ふる歌」などと非常に近似性を持つてをり、彼は憶良の情感の中に生きてゐると云はれても、否定することは出来ないであらう。

○

憶良の性格を規定し、それを明確に把握することの出来るものは、彼が好んで使用した「せんすべなし」の表現である。これについて彼は、「あまたすべなし」(八の一五二)とも表現してゐるが、この諦感は、「世の中は斯くぞ道理」(五の八〇〇)・「世の事なれば留みかねつも」(五の八〇五)・世間は斯くのみならし」(五の八八六)・「世間の道」(五の八九二・九〇四)・「世間を憂しと恥しと思ふ」(五の八九三)・「たまきはる現の限」(五の八九七)・「水沫なす脆き命」(五の九〇二)「倭文手纏数にも在らぬ身」(五の九〇三)・「世の人の貴み願ふ七種の宝」(五の九〇四)と云ふ表現の示すところにある。それは結局、世の中に住りたいが、「住り難いのを哀し」んだ不徹底な諦め心で、「世間の術なきものは……命惜しけどせむ術も無し」(五の八〇四)と云ふ、消極的な諦感であつた。憶良は現実主義であつたが、徹底した現実主義者ではなかつた。渡唐して老荘思想にも、儒教思想にも直接觸れたが、前者を否定して後者を肯定したのは、彼自身が日本古来の道德律と信仰との上に立つてゐたからである。自己と対者・主観と客観・内在と外在・内包と外包との矛盾交叉の隘所に湧い

た溜息、それが彼の作品の根底である。

士やも空しかるべき方代に語りつくべき名は立てずして

(六の九七八)

と云ふ死に臨んでの歌は、彼の悲劇の凝結と云ふべきであらう。当時の社会的環境に在つて、地位も家柄も低い彼が、中年を過ぎて漸く得た官位が地方官であつたことは、社会の中に人間の姿を眺め、人間の生の方向に疑問を持たせて、他の諸歌人の持たない心境と作品とを生む機会を与へたが、病中にあつて静かに自分の一生を考へた時、名を立てることが丈夫の道であると、叫ばざるを得なかつたのである。彼は詩人と云ふよりは、生涯をかけての良官吏であつた。彼の情感に生きた家持が、憶良のこの歌に追和して、「……その子なれやも大夫や 空しくあるべき 梓弓……後の代の 語り継ぐべく名を立つべしも」(十九の四一六四)の長歌と、反歌

大夫は名を立立つべし後の代に聞き継ぐ人も語り続くがね (十九の四一六九)

を作つたのは、ものふの家として伝統的精神の上に、憶良と共通な地方官としての哀感が加はつてゐるが、しかし、それだけではない。旅人死去の時十四才であつた家持に、それ以前憶良と直接の交渉があつたか、否かは不明であるにしても、旅人を通じて彼に親近感を持つてゐたことは想像がつくし、大伴家に伝来してゐた憶良の作品にも、ぢかに接觸してゐたことも考へられる。だが、家持が父旅人の作品に近接せず、憶良に傾いたことにはもつと究明すべきものがあろう。